



「総監挨拶」

横須賀地方総監

海将 武居 智久



私は今夏7月26日付で第42代横須賀地方総監を拝命し着任いたしました。横須賀勤務は第一護衛隊司令以来10年ぶり、陸上部隊はかつてのプログラム業務隊勤務から約25年ぶりとなります。いずれの配置でも充実した日々を過ごしましたが、フネでは職務の関係から横須賀を不在とする日々が多く、また陸上部隊にあつても早朝に出勤して深夜に帰宅する毎日が続き横須賀の街並みをゆくりと楽しんだ記憶はありません。

横須賀地方総監に着任してからは家内と市内をよく散策していますが、今までの横須賀勤務では知り得なかった様々な横須賀の顔を垣間見ることが多く、その都度感慨を新たにしています。よく横須賀は都会と田舎の顔を併せ持つ街と云われますが、この10年の間に洗練された雰囲気のある街へと変貌しつつあるように感じています。

横須賀は私が18歳で故郷を離れ防衛大学の門をくぐってから37年間、私の自衛隊生活の基礎を造り、任官後は海上自衛官のみならず社会人として成長する機会を与え続けてくれました。この街と海上自衛隊に少しでも恩返しをしたい。これは、着任後3ヶ月余を経て私の強い思いとなっています。

皆様ご存じのとおり、横須賀地方隊は三陸沖から紀伊半島に至る広大な海域と一都十五県の陸上を担当警

発行 平成24年11月14日
編集 横須賀水交會事務局

備区としてしています。

海上自衛隊は平成19年度の組織改編によって部隊運用を自衛艦隊にほぼ集中する過程で、地方隊の保有する艦艇部隊とヘリコプター部隊の指揮を自衛艦隊司令官に一元化しました。その後、地方隊は平素には多用途支援艦や掃海艇など少数の艦船を運用しつつ、防衛警備上の事態や大規模災害など多くの兵力を要する事態に臨んでは自衛艦隊司令官から所要の兵力の配分を得て作戦を行う態勢に移行しています。近年、我が国の防衛警備上の関心地域は西に移り、平素から横須賀地方隊に期待される任務は、艦艇部隊への信頼性の高い後方支援と大規模震災への確実な備えが中心となっています。また、急速に進行する少子高齢化社会に対応するべく、優秀な新入隊員の獲得と定着率の向上、離職隊員の再雇用の強化など、隊員が海上自衛官として安心して暮らせ幸福を実感できる環境の醸成が私に科せられた重要な課題です。そのため、着任に臨んで、

横須賀水交會主要行事予定

3月までの主要行事予定は、次のとおりです。なお、最新の情報は横須賀水交會ホームページ (<http://y-suikoukai.daa.jp/>) で御確認下さい。

1 幹事会

(1) 期日 12月12日(水)
14:00 ~ 17:00

(2) 場所 横監会議室

(3) 会議後、懇親会

2 合同賀詞交歓会

(1) 期日 1月20日(日)
13:30 ~ 15:30

(2) 場所 横須賀商工会議所

(3) 会費 4千円(女性2千円)

3 靖国神社月例参拝

2月21日(木) (詳細HPで)

隷下部隊には日々の業務の確実な実施を第一に要望しました。後方支援業務に王道はなく、地道な業務処理が部隊の信頼を獲得する唯一の方法です。防災についても、関係自治体等との信頼感の醸成や機能訓練の積み重ねが、いざというときに円滑な

対応を可能とする基礎となります。

第二の要望事項として、海上自衛隊が創設以来の至高の目標としてきた「精強・即応」は個々の隊員が海上武人として自己実現を果たすとともに社会人として自立できて初めて達成できるとの信念に基づき、「個人の充実」を掲げました。かつて、海上自衛隊が抜本的な改革を始めるに当たって指摘されましたとおり、若き海上自衛官とりわけ船乗り達は浮き草的な生活に陥りやすい環境にあります。彼らの多くは横須賀に地縁や血縁はありません。海上自衛隊と地域社会が協力して彼らを育み、優秀で健全な若い力を地域に根付かせ、地域の活性化につなげていく。活力あふれる横須賀は海上自衛隊にも力を与えてくれます。これは、私がここ数年間にわたって追い求め、機会あるごとに地域の皆様にご協力をお願いしている命題です。

えを賜りますようお願い申し上げます。

「海上武人逝く」

と平野彌横須賀水交會顧問を偲んで

横須賀水交會顧問 海野 幹郎

8月27日、元横須賀桜美会初代会長で現横須賀水交會の平野彌顧問の葬儀が東京の斎場でしめやかな雰囲気ながら盛大に執り行われた。横須賀水交會としては、土井会長を筆頭に葬儀への参列は勿論、通夜・告別式の受付を始め各種支援を実施して我々の敬愛する大先輩をお送りした。告別式では、2代目会長を引継がれた松崎顧問が心のこもった弔辞を拝読され享年88歳で海上武人としての生涯を全うされた故人をお送りする我々の弔慰と感謝の気持ちを、特に故人を知らない多くの参列者に十分に伝えていただいた。

故人と私の関係は私が防大に入校(昭和32年)した翌年に着任された指導官で、それ以来今でも尊敬と親しみをこめて「指導官」とか「教官」と呼ばせていただく関係になった。防大時代の話では、5期の海上要員数人がカッターで伊豆の下田まで帆

走を計画し、浜る学校側を平野教官が乗って指導していただくという条件で説得して成功した話を思い出す。防大卒業後は、故人は海上勤務で活躍され、私は技術幹部として陸上勤務だったので仕事の上で直接ご指導いただく機会はなかったが、退官後、海上桜美会が発足し、その支部としての横須賀桜美会の設立準備にかかわり初代会長としてお仕えした関係で、現在に至るまで10数年ご指導を頂くご縁となった。

故人は昭和19年東京高等商船学校を卒業後、20年1月海兵73期相当で海軍少尉に任官、同年9月海軍中尉で退官。戦後は川崎汽船、五洋水産、海上保安庁を経て27年5月海上自衛隊に入隊。海上幕僚監部や部隊勤務を経て、50年12月第4護衛隊群司令、52年4月横須賀地方総監部幕僚長就任を最後に昭和53年9月に海上自衛隊を退官。この間、33年2月からの約4年間は防衛大学校において指導官として勤務。

平成6年春には御功績に対して勲四等旭日小綬章をご受章。葬儀の遺影はその時の写真であった。退官後は地元横須賀で活躍され、

隊友会第4代横須賀支部長を、後には海上桜美会の横須賀支部を設立し初代会長に就任された。初代会長として、「横須賀を愛し、国を想い、国際的感覚で行動する」をモットーとして我々を指導され、米海軍原子力空母の母港化を推進する当時の市長に提言とアドバイスもしておられた。



平成2年には最愛の奥様に先立たれ、東京に住む御長男や御長女が心配して一緒に住もうという誘いを断わって、つい最近まで鴨居の御自宅に一人暮らしであったが最後は御長女夫妻にお世話になられた。

戦時、敗戦という時代の変化に翻弄され波乱万丈の人生であったが、海上自衛隊には誇りと生甲斐を感じ「自分はこの仕事で生きてきたという実感がある。」さらに、「色々あったが、退職して老いても沢山の人が敬意を表し接してくれる。これが私

の財産であり、それを得ることができたのが海上自衛隊だった。」と雑誌のインタビューで述べておられ、故人の人生観に感銘を受けると共に、それは正しく海上武人のご生涯であったと思うのである。

サイレントネービーの伝統を守ってか、あまり自慢話をなさらない方であったので、現役時代の話を私は知らないが4群司令の時のご活躍の話は松崎顧問の弔辞で聞いた。人の悪口もあまり聞いたことがない。ただ、ユーモアを交えて、「あれは、坂本九だ」というのがあった。それは何ですかと聞くと、「あれは部下の面倒をみずに、上ばかり見ている」という批判であった。惻隱の情があり、人の面倒見が良くて、いろいろお世話になったが、特に我々海自OB有志がNPO法人の設立時は最初から会員としてご支援いただいた。我々役員で忘年会を開くと、丹波笹山（故人は故郷の丹波を誇りにしておられた）の「しし鍋」の材料一式が必ず届いた。一度は、横須賀商工会議所の金融部会とNPOが共催で講演会を計画した時は、当時日銀の国際局長だったご長男の英治氏に講

師をお願いして貰ったことがあった。英治氏は多忙なスケジュールを割いて、しかも休暇を取って横須賀まで来て講演してもらったが、日銀の理事が地方で講演するのは大変なことだと後で知った。また、NPO企画のシニア・パソコン講習会に最初の受講生として応募され、まさしく80

の手習いでEメールを学習され、ご自宅にパソコンを取付・設定してあげたら、早速メールが来るようになった。向学心のあるお方だった。流石に高等商船のご出身だけあってオフイサーとしての品格を備えておられ、生活態度、ものの考え方、ご趣味等も全てオフイサーとしての品位のあるものであった。長くなるので割愛するが、特に記したいのは、故人は我々海上自衛官の理想とする「海上武人」の生きた模範「活模範」として、正々堂々の立派な人生を全うされたということである。その証しは、故人の退官後30数年を経過した今回の葬儀の参列者に2人の元海幕長始め多くの後輩が参列して弔慰を表したことが示している。現職の横須賀地方総監部幕僚長はじめ白制服の自衛官も参列して

くれて、「海上武人」の葬送にふさわしいものになった。

今回のご不幸はまことに残念ではあるが、「散る桜、残る桜も散る桜」でいざれ我々も後に続くことになる。残りの人生を先輩の立派な海上武人としてのご生涯を模範にして有意義に送りたいものである。

平野教官のご冥福を心からお祈りし、生前のご指導を重ねて感謝して筆を置きたい。

【投稿】

今こそ海を舞台に真の友好信頼の絆を活かそう！

（公益社団法人 日本水難救済会理事長）

向田 昌幸

（前 海上保安庁警備救難監）

海上保安庁と海上自衛隊は、戦後の動乱期に「時代の申し子」のように相次いで誕生した。その後、両者はある時はまるで「嫡子」の如く持て囃され、またある時は「非嫡子」か「継子」の如く冷遇されながら、様々な「業」と「しがらみ」を背負って共に政治・外交の狭間に翻弄されてきた。そんな生立ちもさること



ながら、それぞれ固有の役割・機能などを定めた法制面や実力組織としての装備・運用などの実態面からも、両者の関係は「似た者同士」であると同時に、逆に「似て非なる者」でもあるという、一見相反する側面を併せ持っている。だから、一般国民の中に未だに両者の区別がつかない人がいたとしても仕方がないのかもしれない。

そんな海保と海自だが、共に海を舞台に現場第一線に立って「国の平和と国民の安全安心を守る」という大きな任務を共有しているにもかかわらず、お互いの意思疎通や連携協力が必ずしもまだ十分に成熟していないのは残念なことだ。しかも、両

者はこれまでも新たな業務を巡る権限争議に巻き込まれたこともあったし、海上における事件事故等に対処する際の法的立場の相違等から、気まづい空気が流れたり、感情的な緊張に包まれるといったことも経験してきた。その所為か、「海保と海自

をより強固なものにし、国の平和と国民の安全安心を守るため、心を一つにして共に持てる力と英知を結集していくことが、これまでになく強く求められているからだ。

な素晴らしい財産までも手に入れたことは、この上のない喜びである。我々も現役とOBが挙って彼らに倣い、お互いの友好信頼の絆をより一層強固なものにし、互いに切磋琢磨し合う良きライバルであり、かつ、良きパートナーであり続けたものである。そのためには、平素から大いに盃を酌み交わす必要があるだろう。

財団法人 水交會の賀詞交歓会に海上保安大学校同窓会の若葉会会長兼海上保安庁警備救難監として初めて出席させていただいた。その時のご縁で、ひよんなことから「記念艦三笠」の評議員である佐野恭子さんと出会った。彼女は海上自衛隊の有力で見識豊かな女性の良き理解者であり、同時に熱烈な応援団の一員であるとお見受けした。現職を退官する直前の3月初旬に霞が関の警備救難監室で初めてお会いしたとき、『海保のことはよく分からない。全くミステリアスな存在だ』と連発され、『どんな組織で、どんな活動をしているのか、内輪の友人知人が集う小さな会だけど、そこでお話してくれませんか?』と。かつて海上保安庁の広報室長を経験した私としては、『海保のことが分からない』とか、『海保のことが知りたい』などと言われて聞き流す訳にも行かず、それが殺し文句ですぐに快諾した。しかし、それで「土壺に嵌まってしまった」のかもしれない。少々オーバーだが、講話卓話の依頼がまるで落下傘の降下部隊の如く次々に舞い込み、退官した解放感をノンビリ味わうどころじ

は仲が良くない」等と、事情通ぶつた心ない人たちが時にそんな無責任なことを陰で揶揄するのを耳にするのも不愉快だ。了見の狭いごく一握りの人の思慮の足りない思い違いではないかと、できるだけ取り合わない方がいいことだと一蹴する訳にもいかない。その背景や理由にはハード・ソフト両面のいろんな問題がネックとして絡み合っているの、傍から見てもなかなか分からないだろうが、次第に緊張が高まりつつある尖閣諸島問題をはじめ、昨今の激動する国内外の諸情勢に鑑みれば、そんな海保と海自の関係をこのまま看過する訳には行かない。両者には今、これまでのわだかまりや利己的ながらみとセクシヨナリズムを振り払い、大局的な観点に立って意思の疎通を図りながら、お互いの友好信頼の絆

それは、ソマリア周辺海域で横行する海賊に対処することを任務とする派遣海賊対処行動水上部隊に乗り合わせてきた海上自衛官と海上保安官たちとの間に育まれた深い信頼と熱い友情のことだ。海自の護衛艦がアデン湾に向けて出航したのは2009年(平成21年)3月のことだ。このミッションに当初から毎回8名の海上保安官から成る派遣捜査隊が参加し護衛艦に同乗していることは、改めて申すまでもないだろう。こうして護衛艦の艦内で海保の職員と共通の任務を背負いながら寝食と命運を共にするといったことは、海自にとっても創設以来初めてのことで、思うが、これまでの護衛任務を通じて積み重ねてきた輝かしい海賊対処実績に加えて、護衛艦に乗り合わせ、た者同士が固い絆で結ばれるという、海保と海自の歴史に花を添えるよう

私は、決していつも盃を交わすことばかりを考えている訳ではない。「似た者同士」と言えば、磁石のように、向きによっては、くつき合うこともあれば、反発し合うこともある。くつき合うときは良いが、反発し合うようなときは、磁気を帯びていない鉄のような第三者に仲立ちに入ってもらうことで反発し合うことも避けられるかもしれない。そんな蝶番のような人は、できれば国のことを大切に思うが故に、海保と海自双方のことも客観的な目線で叱咤激励してくれるような人であってほしいと思っている。

仲を取りもつ蝶番と言えば、こんな人との出会いがあった。年明けに東郷会館で開かれた公益

やなくなってしまうのだ。「こりゃー海自の皆さんも、佐野さんの熱意にさぞや四苦八苦しているに違いない」等と、他人事ではなくなった。正直に申せば、ほんの少しだけだが「うっせーなあ・・・」と感じたこともなきにしも非ずだ。しかし、決して後悔はしていない。それどころか、むしろ豊かな見識と良識を兼ね備えた素晴らしい方々との出会いをプレゼントして頂いたと、心から感謝しているのである。これまでのごく限られた人達を対象にした私の拙い講話卓話ではあったが、我が国を取り巻く海上保安の現況についてほんの少しでも理解して頂けたとしたら、それだけでも十分なのに、海軍兵学校や海上自衛隊のOBの方々をはじめ、佐野さんに負けないくらいの海自応援団の方々と親しくお話をし、そして今のこの国の人心さえも荒廃し希望も目標も見失ったかのような有り様を憂い嘆いている人達と意見を交わすこともできた。そういう意味で、国のことを大切に思う信念に満ちた「鉄の女」のような佐野さんは、かなり磁力は強そうだが、まさに「仲を取りもつ蝶番」になれるに

違いないと期待しており、これからもお誘いがあれば、どんなにささやかな集まりであろうと、本業を後回しにしても馳せ参じるつもりである。彼女のような、国のことを大切に思うからこそ海保と海自の双方のことも大切に思ってくれる良き理解者が一人でも多くなってほしいと、切に期待しているからだ。

【投稿】

海上自衛隊の今

会員 佐野 恭子



私は25年前に海上自衛隊と知り合い、四半世紀魅せられたように関わり続けた。始まりは日米協会主催の新年会。ダンスフロアが切っており踊り手が無い。主催者は困る。遠くに奇妙な制服の一団が居た。「一緒に恥をかいて下さい」ダンスの後、私

を「ネービー倶楽部」仁丹ビルのB1に連れて行った。彼らの話を聞いた。「こんな報われる事の少ない組織があり、真剣に一生をその目的に尽くそうという人が居るのか！」凄まじく感動した。娑婆は経済一色の時代。金儲け以外に、何がある？国全体が消費文化に沸き立っていた。佐世保から六本木の本庁に転勤した森田良行一佐は「官舎はまだ。寝袋で本庁の廊下に寝ている。風呂に入りたい時は前のアイビスホテルに泊まる」私の居る世界とまったく別の価値座標軸を持つ世界がもう一つ同じ空間に存在する。友人達は誰もが「海上自衛隊なんか知らないよ、何、ジェイタイ？」と実に胡散臭そうに言った。海自の使命の高さ、ゼニカネでは動かない組織と人々・・・もう一つ別の世界」を、せめて友人達に知らせたい。ヒッグズ素粒子の発見と同じ興奮があった。「彼らの高邁な使命に真剣に取り組むひたむきさはもつと正当に評価されていい！」と言う激しい思いがあった。私の25年間は「正当に評価されていないよ！この高潔な使命を一心に果たしてきた人々がさ！」という思いを持って海

自の傍らに立っていた。サイドバイサイドの友人として。自分が専業主婦で当時「3食昼寝つき」と揶揄された事も関係しただろう。14年前友人の船長が四日市港にLNG船で入港した時に招かれた。港長がP3C乗りの青年を連れて来た。彼は「僕のヨメサンはある朝目が覚めたら居なくなっていたんです。何時もいきなり任務で飛び出したから・・・これじゃ家庭とは言えないわよって・・・」素敵な青年だった。このP3C乗りとの関わりが、霞ヶ関の海上保安庁に何う勇気をくれた。私の思い―海自に正当な評価と待遇を得てほしいと言う気持ちと、同じような境遇と立場の海保との絆がもつと強くなれば良いと思う期待から海自だけでなく海保にも関わって行きたい。この2組織はいま、追い風を得ている。世界はとうに大改革に突入した。日本でも2乃至3年以内に大きく変容しないと消滅してしまう大切な側面―例えば自尊心―がある。危機は迫っている。EUの経済破綻、日本の政治力、尖閣諸島、円高・・・日本の切り札、世界一の製造技術は国内に残れなくなり、不安定な金融商品と国債

価格、少子高齢化。私が女で防大出でなく同期を持たない身軽さで言えば「サイレントネイビー」も今、変わる時だ。自分自身で変化するのは苦しい。けれど他者や時流に変えられるのは失うものも大きい。海自を左右する最後のカードは恐らく「政治」だと思う。大勢の叡智を集めゆつくりと勇敢に変化していくのをサイドバイサイドで心をこめて見つめている。

「横須賀市議会便り」

市議会議員・幹事 木下憲司



9月3日(月)から10月5日(金)の間、平成24年第3回横須賀市議会定例会が開会されました。例年第3回定例会は決算審議が主体となります。今回は決算以外の特記すべき事項として、9月21日(金)本会議において、領土問題に関する国への意

見書2件、「尖閣諸島における領海侵入及び不法上陸に関する意見書」及び「李明博韓国大統領の言動に抗議し、政府に対韓国外交の見直しを求める意見書」を賛成多数で可決しました。

尖閣に関する意見書は、活動家らの不法上陸を極めて遺憾として、領土領海を守るための法制度の整備、南西諸島防衛・警備態勢の強化、島嶼及び海域の安定的な維持管理及び領土保全のための外交努力を求めるものです。

また、対韓国外交見直しに関する意見書は、李大統領の発言に関して謝罪と発言撤回を求め、竹島問題に係る対韓国外交の総合的見直しを進めるよう要望するものです。

尖閣にせよ竹島にせよ、国家観なき戦後日本政治、ひたすら友好平和を求める日本外交が招いた結果であると考えます。また安全保障政策軽視の、歴代民主党政権はこれらの流れに輪をかけて、さらに混乱させたものと思います。一方、今回の騒動は、逆説的には日本国民を覚醒させて、本当の意味の主権国家へ向かう機運を醸成したものと理解できます。

普通の国へ帰する道程であつて欲しいと思います。

本件2件の意見書は、会派自民党が提案・主導しました。

(地方議会の国への意見書提出は、地方自治法に定められた行為であり、地方議会が公益に関する事件の意見を国会・関係省庁へ提出するものです)

馬門山海軍墓地墓前参列

第57回目を迎えた馬門山海軍墓地墓前祭は、快晴に恵まれた平成24年5月19日(土)午前9時から約45分間、新緑が薫り、小鳥の囀りが聞こえる馬門山海軍墓地(旧横須賀海軍墓地・横須賀市根岸町一丁目五番地)において肅々と執り行われた。

墓前祭には、ご遺族関係者を始め、吉田雄人横須賀市長、山口道夫横須賀市議会議員、小泉進次郎衆議院議員、木下憲司横須賀市議会議員等、海上自衛隊から三木伸介横須賀地方総監部幕僚長、徳丸伸一掃海隊群司令、伊藤俊幸第2術科学校長、新宮万和横須賀教育隊司令、落修司横須賀警備隊司令等、及び主催五団体(横

須賀水交会、隊友会横須賀支部(主幹事)、大津観光協会、大津地区社会福祉協議会、大津地区町内連合会)関係者並びに一般市民等、計約320名にのぼる多数の皆様が、また、今回初めて在日米海軍司令部から横須賀基地政務補佐官ジョン・P・ニーマイヤー氏も参列した。



墓前祭は、参列者の「一同拝礼」の後、「国歌斉唱」、小田倉光伸隊友会横須賀支部長及び横須賀市長の「追悼のことば」、海上自衛隊儀仗隊による「拝礼」、参列者総員による「献花」、海上自衛隊儀仗隊・ラッパ隊に

よる「弔銃発射」、最後に参列者が「黙とう」を捧げ、終了した。特に、海上自衛隊横須賀地方隊からの全面的な支援を得て実施した「拝礼」及び「弔銃発射」は節度と威厳に溢れたものであり、本墓前祭を挙げる上で欠くことのできないものとなっている。

なお、墓前祭における主幹事は共催五団体が輪番で努めることとなっており、今回は隊友会横須賀支部が担当した。横須賀水交会は共催団体の一つとして受付・誘導等の支援を有志会員が積極的に行い、円滑な墓前祭の進行に寄与した。

当墓地は、明治15年(1882年)に海軍省が戦死、若しくは殉職した海軍軍人の埋葬地として開設し、以後、横須賀鎮守府が終戦まで管理運営を担当していた。昭和24年(1949年)、横須賀市が横須賀地方復員局から維持管理を引き継ぐとともに一般墓地を造成し、現在に至っている。当墓地には軍艦「河内」、「筑波」等の殉職者、上海事変戦死者等の海軍軍人の英霊1592柱とともに一般市民も埋葬されている。また、毎年墓前祭を執り行うに際

しては、儀仗隊・ラッパ隊の派出、及び高台にある当墓地まで椅子200脚の搬入・設置・撤収を含む諸作業の実施に關し、海上自衛隊横須賀地方隊の部隊に多大な支援を頂いており、主催各団体から深甚なる感謝の意が表されている。

我が横須賀水交会からは会長代理として道家一成常務幹事以下約35名が参列し、英霊に対し哀悼の意を表した。

(佐々木幹事 記)

「海軍の碑」記念行事

5月27日(日)1200から1235までの間、ヴェルニー公園(JR横須賀駅前)内に建立されている「海軍の碑」の前において、平成24年度「海軍の碑」記念行事を挙行政した。

本碑は、近代海軍創設から海軍成長の歴史とともに発展した横須賀市のシンボルとして平成7年11月17日、全国の海軍関係者及び有志の皆様からの浄財により建立されたものである。同記念行事は、平成13年までは横須賀海友会が、平成14年に横須賀海友会と横須賀水交会が合同した以降は、横須賀水交会が毎年海軍

記念日(1905年(明治38年)5月27日の日本海海戦を記念して制定され、1945年(昭和20年)に廃止された。)である5月27日に執り行っているものである。



当日は、晴天の中、横須賀水交会会員及び海軍の先輩等40名を超える参加者を得て、行事は整齊かつ厳粛に執り行われた。次第は、ラッパ「君が代」の伴奏による国旗及び軍艦旗の掲揚に始まり、海軍戦没者の英霊に対して一分間の黙とう、土井克彦

横須賀水交会会長の挨拶、引き続き一元横須賀地方総監(第19代横須賀地方総監・海軍兵学校71期)から「特

攻兵器 伏龍(ふくりゅう)」と題した講話が行われた。



講話の内容は、大東亜戦争末期の1944年に海軍が開発した伏龍(潜水具を着用した兵士が五式撃雷(通称・棒機雷)を手に保持して水中で待機し、近接する上陸用舟艇を水際で撃破するという特攻兵器)の開発経緯と運用構想等についての詳細な説明がなされ、通常では聞くことのできない大変貴重な講話であった。

なお、伏龍に使用されていた潜水具と棒機雷のモデルは靖国神社に併設されている遊就館に展示されている。また、伏龍の待機陣地が神奈川県鎌倉市の稲村ヶ崎に現存している。その後、鎮魂の譜(「同期の桜」「巡検ラッパ」「海ゆかば」の3曲)を傾聴し、最後に国旗及び軍艦旗の

降下をもって行事は終了した。短時間であったが、海軍の業績を偲ぶと共に海軍の英霊の追悼と永遠の平和希求に相応しい記念行事であった。行事終了後、参加者は、記念艦「三笠」での記念式典へと向かった。

(佐々木幹事 記)

平成24年度定期総会

平成24年度定期総会、講演会及び懇親会は6月1日(金)によこすか平安閣において盛大に開催された。



総会は道家幹事の司会により、物故者に黙祷をささげた後、会則の規定により土井会長を議長として、三つの議案について審議が行われ、い

ずれも賛成多数で了承された。

その概要は次のとおりである。

① 23年度の事業及び決算報告については、53名の新会員があり、会員数は22年度末と比較し、22名増の713名であること、また、各事業とも計画どおり順調に実施された。

② 新役員の選任については、新たに18名の幹事が選任され、引き続き土井会長の元で一丸となって運営していく体制が整えられた。

③ 24年度事業計画及び予算については、本部業務計画に基づく六つの活動方針ごとに事業計画を策定し、ほぼ例年どおりの事業及び予算となった。

次に平成23年度及び平成24年度に叙勲された会員の方々の紹介があり、受章された14名の方々の内、当日総会に参加された清水一衛様が紹介され、一同の大きな拍手をもって祝福させていただいた。

最後に、新旧役員・新入会員の紹介を行い、成功裏に総会を終了した。休憩の後、「海上自衛隊の現状」と題して、自衛艦隊司令官河野海将による講演会が行われた。

講演は、「大綱の考え方」に始まり

「湾岸戦争」「PKO派遣活動」「昨年の東日本大震災時の災害派遣活動実績」など、自衛隊の活動が年を追って広がっていく状況、すなわち「創る自衛隊」から「働く自衛隊」への変遷について順序だてて述べられたが、統合幕僚副長在任時の経験も加えて、統合部隊としての活動の重要性等についても付言された。



後半は司令官の指導方針のひとつである「伝統の継承」について述べられた。その中で、自衛隊の原点は「当直勤務」にあり「即応体制」は当直勤務があるから維持できること、またしっかりと休養することにより「精強」が保たれるため「直あけ」

が重要である旨について述べられた。さらには、現在海上自衛隊が推進している「抜本的改革」と「業務削減」にも言及され「精強を損なわずに仕事を減らす」というように誤解されている向きがあるが、本来はそうではなくて「精強を維持するために仕事を減らす」ことが本筋である旨を述べられた。

最後に「抜本的改革」は喫緊の課題であり変革しなければならぬ所は、積極的に変えていく必要があるが、海上自衛隊を取り巻く環境がどのように変わっていくかと、「海軍のしきたり」等といった絶対に変えてはいけないものがあるという力強い言葉で講演を締めくくられた。海上自衛隊を支援する会員一同、この講演を通じて、改めて海上自衛隊の現状とこれから進むべき方向性を再認識できた貴重な時間であった。



講演終了後会場を移し、小泉衆議院議員、吉田横須賀市長、県議・市議、防衛関係諸団体代表及び講演に引き続き参加された河野自衛艦隊司令官等防衛省・自衛隊の部隊指揮官・先任伍長など、多数の来賓の臨席を得て、懇親会が行われた。



土井会長のユーモアあふれる挨拶に続いて、来賓を代表して吉田市長、小泉議員から横須賀水交会に対する熱い期待が込められた祝辞を頂いた。引き続き、来賓紹介、祝電披露へと進み、松下護衛艦隊司令官の音頭で高らかに乾杯し、懇談に入った。



会場のあちこちに再会と交流の輪が広がる中、遅れて駆けつけてきた宇都参議院議員に祝辞を頂くと、会場はさらなる熱気を帯びて一段と盛り上がり、宴はいっ果てるもしれない風情であったが、矢野潜水艦隊



司令官の中締め乾杯をもって、名残惜しくも散会した。

(宮崎幹事 記)

「横須賀水交会主催ゴルフコンペ」

6月8日(金)、第24回横須賀水交会主催ゴルフコンペを千葉房総半島のエンゼルカントリークラブにて開催しました。

当日、幹事は横浜市金沢区の自宅を出るとき、天気晴れ、風なしと絶好のゴルフ日和と、幹事の日ごろの行いの良さを再認識していました。ところが車で進出中、久里浜のフェリー乗り場に到着した土井克彦会長から東京湾フェリー第1便が濃霧のため欠航し、2便にて進出するとの連絡がありました。参加者62名中、27名がフェリー利用で1時間半到着が遅れることとなりました。車で進出した35名を先にプレイさせるべく、急遽、組み合わせを変更し何とかプレイを開始しました。前回よりもやや少ない人数でしたが、陸自出身者1名、民間から男性1名、女性3名の参加者があり、華やかさにとぎやかさの入り混じった楽しいプレイをすることができました。

競技は新ペリア方式で実施しています。ただし、同じ人が入賞しないように過去3回のコンペで1、2、3位に入賞した方は、新ペリア方式により算出したハンディキャップからそれぞれ30、20、10%を減点することにしています。この減点は3回コンペに参加しないと消えません。今回は、小山力氏が1年にわたる入

院生活をものともせず、グロス87、ハンディキャップ15、ネット72で優勝、2位には古閑宣仁氏(92、19、73)、3位 柴田忠氏(87、13、74)という成績でした。2位の古閑氏は、水交会コンペで初めて入賞し副賞のパターを獲得して大喜びでした。

ベストグロス賞には、シニアの部(65歳以上)は近藤義美氏がグロス70で、ジュニアの部(65歳未満)は初谷龍夫氏がグロス80でそれぞれ受賞しました。

優勝した小山氏からのメッセージです。「昨年から今年にかけて癌撲滅作戦(3回の手術と抗がん剤、放射線治療)に従事しましたが、横須賀水交



会からその『快気祝い』を戴いたようで感無量です。ゴルフのできる身体に快復

したことに感謝です。」

水交會主催コンペは会員の親睦を目的としたゴルフ大会ですが、水交會会員のみなならず、陸海空自衛隊のOBや友人・知人・家族まで幅を広げて参加者を募り、水交會の活動に理解を深めていただければ幸いと思っています。またこの中から水交會に入会していただければこのコンペの目的を十分に果たすことができるものと考えています。たくさんの方の声をかけて参加者を増やしていただくようご協力よろしく願います。

(持永幹事 記)

横須賀上級海曹会に対する水交會の概要説明会

平成24年6月12日(火)横須賀水交會は横須賀上級海曹会(会長・田村幸司海曹長)に対し水交會の概要について説明する機会を得た。

これは田村会長から横須賀水交會に対し、入会希望者を海曹クラスにも広げるために水交會の目的、活動内容等に関する説明会を開いてはと提案していただいたことを受けて実施することになったものである。

説明会は上級海曹会が年に一度実

施している「総会」に合わせて、横須賀地方総監部大会議室にて実施された。

横須賀水交會からは土井会長及び清水常務幹事(会勢担当)が参加し、まず土井会長から海上自衛隊を取り巻く環境が、会長の現役時代に比べ激変していることの事例の紹介及び海上自衛隊や各隊員が日頃の任務を整齐と遂行していることへの敬意と感謝が述べられ、その活動を支援する水交會の状況や重要性についての全般的な話があった。



ついで清水幹事から水交會のしおり及び補足説明資料による詳細説明

が実施された。資料によると、水交會は昭和27年、旧海軍時代の水交社を受け継ぐ形で任意団体として発足。以後昭和29年には厚生省所管の財団法人に認可され本格的な活動を開始したとある。平成13年には海上自衛隊の退職者で組織する任意団体「海上桜美会」を合同し、移行期間を経た後、平成16年度から新体制を発足させ、平成23年6月に公益財団法人として認可され今日に至っている。

また水交會の事業紹介については、海上自衛隊の活動に対する支援協力のひとつである海外派遣部隊の見送り・出迎えや、先人の慰霊顕彰のための馬門山海軍墓地墓前祭及び海軍の碑記念行事の挙行といった具体例が分かりやすく示された。

当日、会議室には横須賀在籍各部隊の先任伍長を含め各部隊から上級海曹約50名が集まり、清水幹事の説明を熱心に聞き入る姿が見られた。特に海上桜美会と合同したことにより、それまでの幹部出身者の親睦団体という性格から准・曹士も含めた海上自衛隊出身者全体におよぶ性格の団体へと移行した点についての理解が得られたことと思われる。

今回の上級海曹会に対する説明会は初の試みであったが、水交會の活動を幅広い層に理解を広げるといふ初期の目的は十分に達成したものと史料される。

(宮崎幹事 記)

むらさめ、はるさめ帰国出迎え

平成24年7月5日(木)、ソマリア沖・アデン湾において、第十一次海賊対処活動に従事していた部隊(指揮官 第一護衛隊司令 山本克也1佐)の護衛艦「むらさめ」(艦長 松野征治2佐)と同「はるさめ」(艦長 佐藤誠2佐)が任務を終えて、横須賀に入港、帰国しました。本年1月に出現し、2月中旬から現地で護衛活動を行い、5月下旬任務を終了。「いかづち」及び「さわぎり」と交代、この度帰国したものです。

佐藤正久参議院議員、神奈川県議会竹内議長、横須賀市議会副議長、日本船主協会関係者、河野自衛艦隊司令官ほか各部隊指揮官、隊員、家族など多数の方々が出迎え、横須賀水交會としても、土井会長ほか多くの会員が参加し、自衛艦旗小旗、水

交會旗を掲げて出迎えました。



河村横須賀地方総監執行による帰国行事は、第1護衛隊司令帰国報告、防衛大臣訓示(河村横総監代読)、自衛艦隊司令官訓示、来賓紹介などが整齊と進められました。大臣の訓示では「様々な物品の輸出入あるいは多くの人々の往來の安全確保の一翼を担う本活動は、全ての国の繁栄を支える大事な任務であり、安全保障及び国際協力の面でも高く評価されている。本任務を成し遂げたことに誇りを持ってほしい。」と隊員を激励されました。

第十一次隊は32回、188隻の船舶を護衛して安全に航行させました。その成果は大臣訓示にもあるとおり、国際的にも高く評価され、関係船舶からは格別の感謝をされています。海賊対処は、長期間にわたる任務行動であり、厳しい環境条件のもとでの緊張は計り知れないことと思います。国際的な責務を果たし、国益に寄与した指揮官及び乗員に対して、深甚の感謝と敬意を払います。(宮崎幹事 記)

平成24年夏期防衛講座開催

演題「中国の海洋進出」

講師 平松 茂雄

元防衛研究所研究室長

恒例の横須賀防衛諸団体共催・夏期防衛講座が横須賀商工会議所において7月28日(土)に開催された。当日はうだるような猛暑であったにもかかわらず、会場は現役自衛官を含む来賓及び熱心な各団体会員並びに一般公募から選ばれた約30名の聴講者で、ほぼ満員の盛況であった。講座は、第一部「講演」、第二部「懇親会」で構成されている。講演を熱心に聴講した後、第二部では講師を

囲み、参会者同士が和気藹々の懇談を通じてしばしの暑気払いをするこども、横須賀夏期防衛講座の楽しみの一つとなっている。

今回の講演は講師に元防衛研究所研究室長の平松茂雄先生を迎え「中国の海洋進出」と題して行われた。平松先生は慶應義塾大学の御出身で、防衛研究所研究室長を経て、杏林大学で教鞭をとられたとのことで、この間中国軍事研究に打ち込まれ、中国の軍事面における研究者としての活躍が顕著である。



第一部は小山横須賀防衛協会会長による開会挨拶に引き続き、幹事である小田倉隊友会横須賀支部長による講師紹介で始められた。講師が1980年代に上海でしか

に目撃された中国の衛星追跡船がまさに最初の大陸間弾道弾の試験に供されたものであったこと。当時は2隻程度であったのが、近年ではさらに増強され4〜5隻体制となり護衛の戦闘艦艇や補給艦を含めかなり充実した兵力構成となり、従来は北半球と南半球といった大雑把な区分で活動していたものが、現在ではインド洋、北太平洋、南太平洋及び大西洋とより広範かつ細分化されて展開しているという例を挙げられ米国に対抗するために、まずは大陸間弾道弾の保持という毛沢東の方針が脈々と続いているとの考えを披露された。そして中国が10年周期で進歩発展し、じつくりと着実に海洋覇権を



講師が1980年代に上海でしか

拡大しようとしているという点について分かりやすく述べられた講演であった。

第二部「懇談会」は会議室向いの展示ホールに場所を移して実施された。そこかしこのテーブルで参会者



同士の防衛談義に花が咲き、会場は熱気に包まれていた

が、開会からしばらくして駆けつけて来られた小泉進次郎衆議院議員の軽妙洒落な挨拶に会場は大いに沸き、会はずらに盛り上がった。熱心な意見交換が行われるうちに時間は瞬く間に過ぎ、第二部も幕となり、平成24年度横須賀夏期防衛講座は初期の目的を十分に達成し予定通り終了した。

(宮崎幹事 記)

叙勲受章者

次の会員の方々が叙勲を受けられました。

春の叙勲 (敬称略)

瑞宝小綬章

伊藤 敦之

出来 義彦

藤田 紀世資

牧山 元

危険業務従事者

瑞宝双光章 清水 一衛

青柳 辰夫

秋の叙勲

瑞宝中綬章 金子 豊

古賀 雄次郎

瑞宝小綬章 出水 克明

玉川 尚男

佃 剛

(本多事務局長 記)

訃報

本年5月以降、次の会員が逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。(敬称略)

平野 彌(海兵73) 8月22日

(本多事務局長 記)

新(編)入会員(4月~9月)

次の方々が横須賀水交会に新たに入会(編入)されました。(敬称略)

野口均(幹校28) 新藤 直樹(有志)

奥村 徹(有志) 谷本 修(幹校26) 森山 法人(有志) 鹿見山 泰法(有志)

一瀬 良文(幹校30) 山本 政雄(幹校31) 甲斐 豊裕(有志) 北村 正徳(幹校32) 山崎 純(有志) 藤井 真礼緒

(有志) 豊崎 勲(横練180) 神田 義信(有志) 藤井 聖一(幹校30) 高野 幸美(有志) 小谷 晴男(員教18

1) 藤村 栄次(幹校31) 渡辺 昇

(有志) 土門 和枝(有志) 梅津 資丈

(有志) 軽部 裕(横曹候02) 永嶋 秀康(有志) 宮原 由美(有志) 高橋 正美(婦人05) 萩野 淳(有志) 清水 洋

(幹候29) 石坂 薫(事務官) 山本 真侍(佐練185) 関根 美和(有志)

河原 誉政(幹候30) 鶴田 光政(幹予55) 井ノ久保 雄三(幹候30) 杉本

正彦(幹候25) 加藤 耕司(幹候27)

角田 義仁(有志) 岡崎 厚(有志) 安川 裕介(遺族) 森 泰二(幹候30) 佐藤 美香子(有志) 松坂 忠光(有志)

田村 政信(有志) 山藤 俊也(有志)

薬師 輝久(有志) 長田 尚久(有志)

能登谷 誠明(有志) 栗原 靖(幹候52) 清水 恵美(有志) 八木 博之(横教119) 岩本 由紀子(有志) 齊藤 政行(幹候23) 佐藤 宏一郎(有志)

(高橋幹事 記)

【編集後記】

このたび、岩永幹事から編集を引き継いだ常務幹事の宮崎です。紙面の充実を図るためには会員の皆様のご協力が不可欠でありますので、積極的な投稿をお願いいたします。

私事で恐縮ですが、本年8月22日に逝去されました平野顧問は、注) 統友会へのクラス幹事を務めておられたので、私が統幕学校で教務班長を務めておりました時には、幹事会の場で毎年お会いする機会を得ておりました。御縁あって横須賀水交会でも一緒にできたので、またご指導を賜りたいと思っていた矢先にご逝去されましたことは、まことに残念でなりません。改めましてこの場をお借りしてご冥福をお祈りいたします。

(注) 統友会

統幕学校入校者・卒業生及び学校職員との親睦・切磋琢磨及び統合教育の充実・発展を図ることを目的とした会